

1日も早い復興を一岩手県の被災地視察

1. 被災地視察

岩手県北部を7月22日、南部を7月24日視察した。80 余名が大型バス2台に分乗、岩手県庁職員のガイドのもと視察した。県庁の方々には大変にお世話になり心より感謝します。以下に写真を交え紹介します。

2. 1岩手県北部視察

13:00、JR 盛岡駅を出発、15:30 に久慈市港湾部の高台に到着し市職員から震災被害状況を聞いた。久慈市の人口は 36,875 名、死者 4 名、行方不明 2 名、住宅全壊は 65 戸、他の地域と比較すると被害は小さかった。その理由は過去の津波の経験から住宅は高台に設置するよう進めてきたこと、海岸域には漁場や魚市場、さらには地下石油備蓄基地があり、常時 200-300 名の人々が働いていたり行動しているが、市として防災訓練を繰り返してきた。今回はその効果が表れほぼ全員が速やかに高台に避難した。久慈港には外防潮堤と内防潮堤があり、いずれも今回の津波で大きな損傷を受けたが津波を和らげることができた。それと久慈市には3つの川が流れ込んでおり、ここに津波が吸収されたこともあり市街地への直撃を避けることができた。地形的なこと、過去の津波の経験から居住区の高台移動、防潮堤の2重化、地道な訓練の積重ね、などで被害を最小化することができた。津波の高さは 8.6m であった。一方、港につながっていた漁船はほぼすべて流されてしまった。函館市から 228 隻の漁業用小舟が無償で送られた。本当に感謝しており、魚市場は修復中ではあるがこれらの船を使って漁が再開されつつある。

約 30 分の説明や、状況の写真どりのあと、次の目的地である野田村に向かった。入り組んだリヤス式海岸を眼下に見ながら山あいを走り抜け、野田村港湾部に 16:30 に到着した。村役場の方、数名に出迎えをいただいた。見渡す限り海岸線の松林は姿を消し津波の凄さをみた。海岸脇の道路にはガレキが山積みになっていた。野田村は震災前人口は 4,632 名で死者 38 名、負傷者 17 名、全壊家屋 309 戸であった。防潮堤は 10.3m でありこれを 12.0m にかさ上げ工事中に今回の津波が襲来、殆どが決壊し、もろに町中に津波が押し寄せた。沿岸を走る三陸鉄道の軌道も後かなくさらわれてしまった。金毘羅さんの石碑や神社の石碑などが散乱したままになっていた。海と天に向かって折れた松の木が悲しそうに吠えているような光景も目の当たりした。



野田村、ガレキの背後に村があった。今は何も無い。



野田村、松の木は波でもっていかれ表皮がむけ、僅かに残った木は悲しそうに天に向かって吠えている愛犬のようであった。

盛岡駅に到着したのは丁度 20:00 であった。

2. 2岩手県南部視察

今日は日曜日である。盛岡駅出発は 8:30、バス2台に分乗して出発した。本日は釜石、大船渡、陸前高田の3箇所の視察である。釜石市に向かう途中、遠野の駅の道で休憩した。広い駐車場の一角に何と 10kW マグナム風力発電機が悠然と回っていた。



遠野市風の駅にて、悠然と回るマグナム風車

マグナム風車は展示会では何回か見ていたが実際に現場で稼働しているのを見たことは初めてであった。風は3m/s以下であったがヨーも働き最適方向に向きを変えながら発電していた。

11:30 釜石市の職員が待っていてくれた説明場所、鉄鋼歴史館の屋上に全員集合した。天候も晴天で釜石湾を一望でき、真正面には市のシンボルである女神像がそびえていた。釜石市の被災状況は死者 869 名、行方不明 361 名、負傷者多数、建物全壊半壊 3,723 棟、6 月末現在で 46 カ所に 1,354 名の方が避難生活をしている。湾の入り口に北側と南側にそれぞれ 1km 長さの水平段違い型の防波堤が築かれており、6 分間、津波の到達を遅らせることができ、これが多くの人命を助けた、それと新日鉄釜石の廃石炭を基礎材として約 5m 高さの盛土が台形型に作られており、これが津波からの衝撃を和らげた、との説明であった。防波堤は 3 分の 1 くらい壊れていた。高台と対面の岸壁には、岸壁に乗り上げ食い込んで動きが取れなくなった数千トンクラスの大形貨物船が見えた。沿岸の道路わきにはガレキが積まれ、半壊した家々が点在していた。



釜石市、海岸沿いの道路脇にはこのような光景がいくつも見られた。



優美さを誇る釜石港湾の入口防波堤右側部分は破壊された。

市職員の説明によれば、釜石市はこれでも状況整理さ

れて管理されていたが、近隣の 100 から 1,000 戸の 10 あまりの町村では全滅に近い被害を受けている。被害は 1 割が地震、9 割が津波、それも引き波による被害、地盤沈下は 60-80cm である。避難者は避難 3 日目から不安とやりばのない怒りがピークになり、あわや暴動になる寸前の状況のときもあった。新聞報道されているようなきれいごとではなかった。つらい時期があった。と、受けてたつ自治体職員は話していた。

12:30、釜石をあとに大船渡をとおり陸前高田に向け出発した。13:45 に大船渡を通過したがバスからの見学のみであった。遠方には港や魚市場が壊滅的な惨状になっている様子が垣間見えた。ここを過ぎたころから道路脇の 5 階建てのマンションが 4 階まで窓ガラスがなく、5 階のみ僅かに窓ガラスが残っている建物が散見、あたりは住宅が流され野原になり、ところどころにガレキが集積されている光景を見かけるようになった。大きな橋桁も無残に落下、鉄骨をさらけ出していた。



大船渡市、道路沿い 5 階建マンション、僅かに 5 階のみ原型あり。

14:15、陸前高田市に到着した。バスから全員降りることが許可された。もとは松原が広がり防砂林の後ろの国道であったが今は、その松林もなく直ぐそばまで海になっている。市の中心部はコンクリのビルを除いてはほぼ何も建っていなかった。沿岸の空き地にはガレキが山のように積まれていた。1本の松だけ残ってそれを助けようという会も立ち上がっている。残念ながら、我々のバスが止まった位置からはその松を見ることはできなかった。陸前高田の砂浜は岩手県有数の海水浴場でありレジャー施設であった。立派な白亜の高層ホテルも今は無残な姿になっていた。陸前高田市は、死者 1,524 名、行方不明者 579 名、負傷者多数で不明、全壊半壊家屋 3,341 棟で、6 月末現在で 50 箇所に 1,917 名の方々が避難生活をしている。岩手県内で最も被害が大きかった地域である。14:50、陸前高田を出発、10 分も走ろうち流され壊れた自動車置き場が見えた。数えきれないほどの車があった。所有者に確認できるまでは処分ができない、との説明であった。

15:20,陸前高田の道の駅到着、次の詩を見つけた。

“もう少しで春が訪れるある日の昼下がりに、とてもとても大きな地震が高田松原を襲いました。地面が裂け、地中から黒い水しぶきを吹き上げながら、強い横揺れ続きました。松たちは根が浮き上がるのを感じて身構えました。「これはただごとではないぞ！」「こんな大きな地震



陸前高田、市街地の中心部は今も海水が引かない無人地区に。



陸前高田、見るも無残な建物の中

は経験がない、きっと津波がくるぞ！」古い松たちは大声を出して注意しあいました。やがて、入江の沖のほうから、灰色の水煙を立てながら大きな波のかたまりが向かってくるのが見えました。大津波です。それは、とてもすさまじい勢いで「ゴオーツ」と音をたてながらやってきました。大津波はたちまち高田松原の松たちを襲いました。小さな松たちは、砂の混じった波に巻き込まれ、倒されころげまわっていました。歯をくしばって耐えた大きな松も強い引き波に倒されました。高田松原の7万本の松たちは、根元からなぎ倒されたり折れたりして、一気に消えてしまったのです。”

本当に現場を見て復旧復興を言う前に自分も何かしなければいけないと思いました。

(再生可能エネルギー協議会 池田 誠)



陸前高田、流された無数の車が集められている。

